

野際より。一刀三股小破墜され。悲哀しや。忠憤我烈の英雄也。これあ
 らかき立持るべき。朽する大樹の倒る如く。天相小撞と勝ぶとあり我曰天
 又去清菟倚て。惜や首試搔頑うり。 は後安田作ま清はまを海軍が由る小部とあり
在たりしが秀吉天下にまする成りて世成をれ
名をとりて大野源左衛門と改名し九死ありたれ 備前大將信長公を。後堂出
ごの面小撞物の費せしむり自ら首をひて死をとり と容るせむひ。四方の関門も火を放ちて。そのあか不投むひ。沂生害成を
 まりくける。逝年四十九歳までおろくろ。嗚呼悲哉天正十年六月二日
 せも如何なる悪凶日ぞや。過昔天文の初 信長公の天文三年 甲午に誕まらるる
 年六月まで。海内小縦横しむひ。武威を公の随ふ奮ふ。天下に崩れ
 せ頑強め。庶民城塗炭の中に救ひみ哉七道の敵國も。その英名を聽と
 した。天魔鬼神の縁くに悲畏。証ざるふ半の降る輩多かり。沂身は三位
 右大臣に昇進し。大業既小成然とべきを。逆絨光秀がたぬ小絨せられ

多ひしあそ。朽憾といふもあろうあり。沂傍小在合を。士扈從倅。沂尊
 骸小茶毗具を蔽掩せむるを。四方より火攻りて。其傍に座を連袂。胆十
 文字に芟剗て。會齊一小火に祀投り。殉死せしことを哀哭ありたれ。遠胸猶
 も沂所方小く毆殘されしる。公士軍九十餘人。遠場那庭に踏止し。鱗身小
 ありて若我せし。大書院より。沂寐不造。炎齡くと燃熾り。天衢も沖る許
 此見ゆきを。別才の主君の沂生害しり。と察し。まのるを。各々敵と違
 利一個も残らば我死して。忠我小其為我轟せし。嘆き。賞す。

繪本豊臣勲功記五編卷之七終